

平成17年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 採択教育プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	： 心に関する研究科横断プロジェクト型教育
機 関 名	： 慶應義塾大学
主たる研究科・専攻等	： 文学研究科 哲学・倫理学専攻, 社会学研究科 心理学専攻, 社会学研究科 教育学専攻
取組実施担当者名	： 岡田 光弘
キ ー ワ ー ド	： 哲学・倫理学、実験心理学、神経科学一般、認知科学、心の理論

1. 研究科・専攻の概要・目的

明治年間に開設された本学哲学専攻は大正年間にすでに博士レベル研究教育を開始し、戦前から博士号を付与した。又戦後の新制大学院制度の開始とともに新制博士・修士課程を開設した。一方においてこのような人文科学系の長い伝統の蓄積の視点を重視し、他方において新たな現代社会のニーズや国際学術界の動向や国際連携に敏感に対応できる人文社会学系大学院の在り方を求めて大学院改革を進めてきた。実際、本プログラムで焦点を当てる「心」研究は哲学・倫理学を中心とした二千数百年の人文科学系研究の歴史があるとともに、近・現代になって心理学・教育学等の社会学系の分野としても独自に発展してきた。又、これら人文系・社会学系の研究蓄積や問題意識に、脳神経科学・生命情報科学等の理系の現代の科学技術を組み入れて「心」研究に取り組む段階に入っている。このような状況において、人文系社会学系を横断し、さらに科学技術系、医学系も視野に入れた新しいタイプの文系主導型文理融合的研究者の育成が課題である。大正期から開始された本哲学専攻の研究者養成の歴史は、心理学専攻や教育学専攻等の社会学研究科や言語文化研究所等を育成し分離独立させた歴史でもあった。これらを今、現代的な視点で本プログラムを通じて統合する新しい重要な局面を迎えた。このような背景のもとで、文学研究科 哲学・倫理学と社会学研究科 心理学、教育学が研究科を横断して心に関するプロジェクト型学際プログラムを確立することを目的とする。慶應義塾では「未来への先導」を基本コンセプトとする21世紀グランドデザインのの一つとして「知的価値創造」を掲げている。本プログラムもこの具体的な取組と位置付けられる。平成20年の慶應義塾創立150年に向けて大学院教育改革は重要な位置を占めており、そのような状況の中で本プログラムが大学院教育改革の先導役を果たし、プログラムの継続・発展が期待できる。

2. 教育プログラムの概要と特色

既存の大学院研究科の枠組を越えた学生主体の共同プロジェクト型のプログラムを通じて、国際的レベルの若手研究者育成を目指す取組である。

本学の「心」研究教育に関する文学研究科と社会学研究科の3専攻が結集し、これまで制度上不可能であった専攻や研究科を越えた大学院教育システムを本分野(心の研究)で実現する。本プログラムの大学院生は本プログラムで設置される研究プロジェクトテーマの一つを選択し、学生主体のプロジェクト運営を進める中で、研究能力を修得する。又、総合大学としての本学の特徴を生かして、医学研究科、理工学研究科との提携を通じて、本プログラムの学生に関連する先端科学技術の研修機会を与えるとともに、本プログラムと同一領域の海外提携大学院との教育協力を通じて、本プログラム学生に国際性を備えた人材教育を提供する。

国際学界の新しい動向や社会的ニーズに適応する分野横断型の人文・社会学研究の人材養成が可能となる。特に「心」の研究分野は哲学・倫理学、心理学、教育学等の人文科学、社会科学の広い領域における学問の集積と最先端科学技術の結合が求められている。このような分野横断的な研究の先導役となり得る学位取得者を「心」研究分野の学術界及び教育・医療政策等の「心」研究の応用分野に送り出す。

本プログラムの海外連携校であるエコールノルマルシューペリキュール、パリ大学第一校(ソルボンヌ校)、エコールポリテクニクと本プログラムの国際連携を行なう。本プログラムのプロジェクトへの海外研修生の参加や海外連携先の教員による本プログラムの指導や、年度末報告会での学生プレゼンテーション審査への海外連携校教員の参加などを実施する。

文研・社研 研究科横断プロジェクト型教育プログラム履修プロセスの概念図

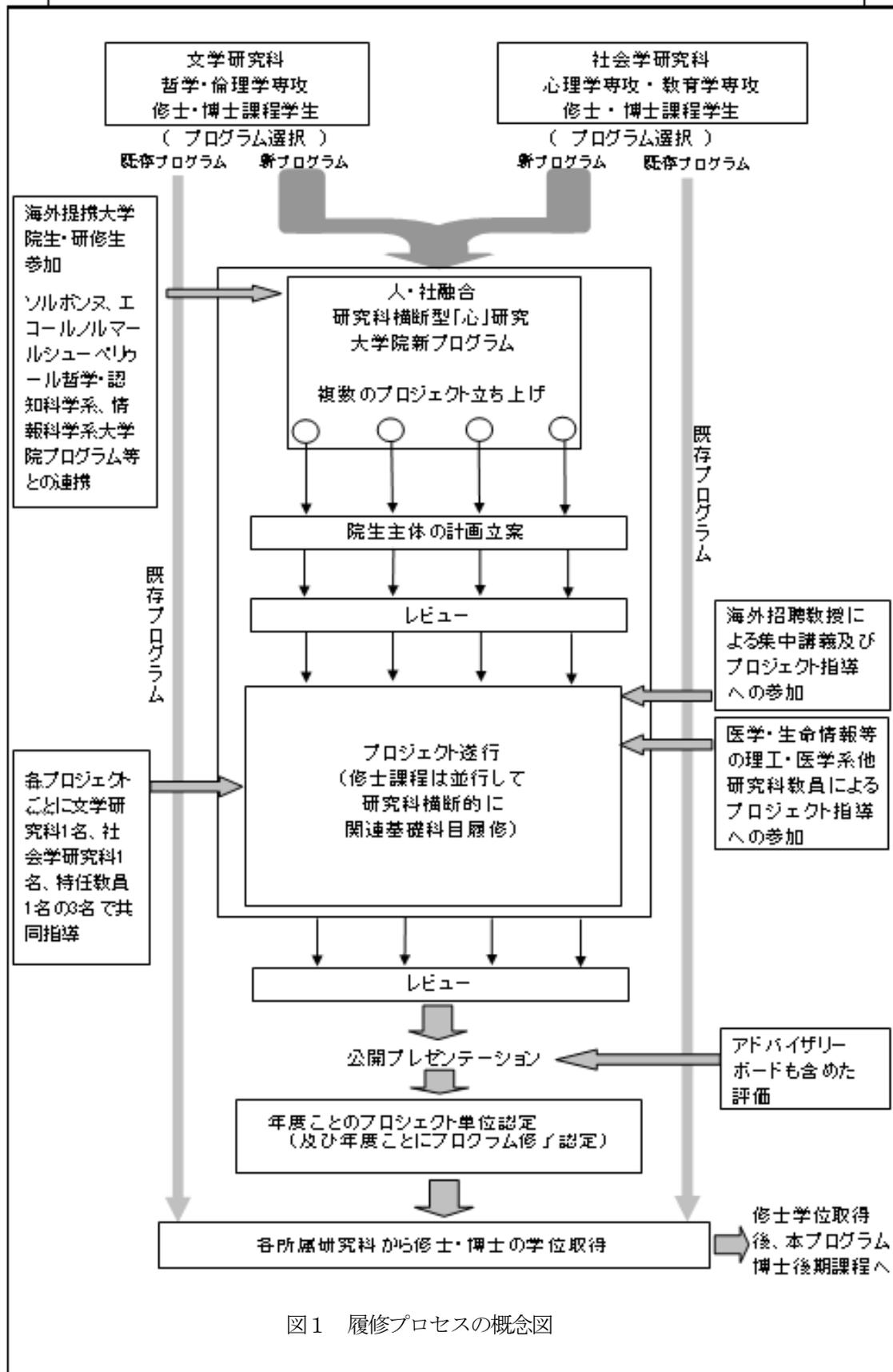


図1 履修プロセスの概念図

3. 教育プログラムの実施状況と成果

(1) 教育プログラムの実施状況と成果

大学院研究科を横断する新しい学際的プログラムを実現した。特にこれまでの授業形式や演習形式では実施できなかったプロジェクト型教育をこの研究科を横断して複数の研究科に共通するプロジェクト科目を正式な大学学則上制定した。研究科を横断して複数の専任教員がチームを組み、本プログラムのために新規採用したプロジェクト教員が加わる形で各プロジェクトごとに集団指導体制を確立した。心に関する学際的な4つのプロジェクトを走らせた。又、海外連携校との間でプロジェクト共同指導も行った。本プログラムのためのRA制度を確立した。公開中間報告会、年度末公開成果報告会による審査を経て、対象学生に本プログラムの認定証を塾長名で授与する制度を確立し、実施した。

平成18年度は次のような4つのプロジェクトを遂行した。

① プロジェクトA

『論理思考に関する論理，行動遺伝学，脳科学，情報科学の融合的学際研究』

- ・指導教員3名・(文学研究科 哲学・倫理学専攻専任教員1名、社会学研究科 教育学専攻教員1名、プロジェクト教員1名)
- ・対象学生2名・(文学研究科 哲学・倫理学専攻修士課程学生1名、社会学研究科 教育学専攻博士課程学生1名)

② プロジェクトB

『動物とヒトの推論に関する脳科学』

- ・指導教員3名・(文学研究科 哲学・倫理学専攻専任教員1名、社会学研究科 心理学専攻教員1名、プロジェクト教員1名)
- ・対象学生3名・(文学研究科 哲学・倫理学専攻博士課程学生1名、文学研究科 哲学・倫理学専攻博士課程学生1名、社会学研究科 心理学専攻修士課程学生1名)

③ プロジェクトC

『倫理的判断と脳内機構』

- ・指導教員3名・(文学研究科 哲学・倫理学専攻専任教員1名、社会学研究科 心理学専攻教員1名、プロジェクト教員1名)
- ・対象学生3名・(文学研究科 哲学・倫理学専攻博士課程学生1名、社会学研究科 心理学専攻修士課程学生2名)

④ プロジェクトD

『ランダムネスの創発』

- ・指導教員3名・(文学研究科 哲学・倫理学専攻専任教員1名、社会学研究科 心理学専攻教員1名、プロジェクト教員1名)
- ・対象学生4名・(文学研究科 哲学・倫理学専攻博士課程学生2名、社会学研究科 心理学専攻博士課程学生2名)

(2) 社会への情報提供

年2回の成果報告会を公開の形で行い広く成果を公表した。特に年度末成果報告会は公開国際シンポジウム形式で行い成果を国際発信した。ホームページ上で各プロジェクトの進行状況及び成果を公表した。

又、成果報告会紀要を刊行した。

※ 会議実績

- ① 魅力ある大学院イニシアティブ立ち上げ記念大学院生セッション（論理思考と認知に関する国際シンポジウムとの共催）【プロジェクト全体】

日時・・2005年12月20日(火)

会場・・三田キャンパス東館6階

- ② オントロジー学際研究集会【プロジェクトA】

日時・・2006年3月10日(金), 11日(土)

会場・・三田キャンパス南館 B4F ディスタンスラーニングルーム

- ③ “認知鳥類学の可能性”（日本動物心理学会との共催）【プロジェクトB】

日時・・2006年3月16日(木) 14:00～16:30

会場・・三田キャンパス東館4Fセミナー室

- ④ 確率概念をめぐる哲学・心理学の横断的研究

【プロジェクトD】

日時・・2006年3月28日(火)

会場・・研究棟1階 第1会議室

- ⑤ 倫理判断への多様なアプローチ【プロジェクトC】

日時・・2006年3月30日(木) 13:00～18:00

会場・・三田キャンパス東館4Fセミナー室

- ⑥ 社会的認知と推移的推論 比較認知科学における展開【プロジェクトB】

日時・・2006年5月19日(金) 19:15～

会場・・三田キャンパス大学院棟 341 B教室

⑦ 18 年度中間報告会【プロジェクト全体】

日時・・2006 年 7 月 14 日(金) 13 : 00 ~
会場・・三田キャンパス東館 4 階セミナー室



写真 1 18 年度中間報告会 (その 1)



写真 2 18 年度中間報告会 (その 2)

⑧ 18 年度成果報告会【プロジェクト全体】

日時・・2006 年 3 月 14 日(金) 13 : 00 ~
2006 年 3 月 15 日(金) 10 : 30 ~
会場・・三田キャンパス東館 8 階ホール室



写真 3 18 年度成果報告会 (その 1)



写真 4 18 年度成果報告会 (その 2)

4. 将来展望と課題

(1) 今後の課題と改善のための方策

これまでの大きな教育成果に基づいてさらなる発展を目指す。これまでは文学研究科と社会学研究科の 2 つの研究科を横断する心の学際教育研究を行ってきたが、今後は学内の他研究科(医学・生命科学系や理工学系)を含むより大きな枠組で研究科横断プロジェクト型教育を発展させることを目指す。又、本プログラムに関して海外連携校(エコールノルマルシュペリユール及びパリ大学ソルボンヌ校等)との国際連携をさらに発展させる。

(2) 平成 19 年度以降の実施計画

18 年度に確立した本大学院プログラムの 19 年度以降の継続が大学レベルで正式決定している。特に本プログラムにおいて要の役割を持つプロジェクト教員(准教授レベル) 2 名を大学が継続して雇用し、本プログラムの事務局スペースも維持する等、大学側が全面的に本プログラム継続をバックアップしている。18 年度と同様の 4 つのプロジェクトを走らせ、文学研究科、社会学研究科の複数の専任教員とプロジェクト教員が各々のプロジェクトを指導する体制を敷いている。18 年度に引き続き、年度末の国際審査を経て塾長から対象学生に本プログラム認定証が授与される。

「魅力ある大学院教育」イニシアティブ委員会における事後評価結果

【総合評価】
<input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的は十分には達成されていない
〔実施（達成）状況に関するコメント〕 研究科横断的なプロジェクト型教育によって国際性を備えた研究者を養成するという教育プログラムの目的に沿って、これまでに築かれてきた豊富な海外大学院とのネットワークを活用しながら、教員の適切な指導の下に計画が実施されており、海外の大学との教育面での提携の在り方などに関して、我が国の大学院教育の実質化に波及効果をもたらすと思われる。 今後、本教育プログラムの実施・成果を踏まえた課題等の検証を十分に行い、自主的・恒常的な展開を推進しながら、ホームページや報告書等での成果の公開に関して更なる充実を図ることにより、国際性を備えた若手研究者育成の面で大きく発展することが期待される。
（優れた点） ・ 複数の研究科にまたがるプロジェクト教育における教員の指導のあり方、海外の大学との連携の仕方、本教育プログラムに対する大学のバックアップの仕方に関して優れている。
（改善を要する点） ・ 文理融合研究者の養成を目指すという所期の計画からすれば、医学研究科との連携に関する更なる工夫が講じられることが必要である。 ・ 本事業が教育プログラムであることを考えると、今後の展開に向けて、可能な限り、多くの学生を巻き込むための工夫が講じられることが必要である。 ・ 本事業結果報告書の記載内容の充実も含め、ホームページ等による成果の公開に関して、今後、より積極的な対応が望まれる。